

65 明治8年11月18日 菊池長閑宛

(長閑注記1) 第五号十一月十八日

(長閑注記2)

此度ハ別段申上候事無之候得共写真を取候故鳥渡添状仕候三人立ノ内左に居齋藤と申人ハ私と同校に通候中の人ハ小村とて一里計隔たる龔に居候孰レも同行したる人に候三人にて写相談を始てより天氣の好時に空囊錢有時ハ天氣悪遂に一ヶ月計延引致候二三返婚禮を見為寺に参候式ハ概夜に行候寺にハ親戚朋友中央に座を占見物人ハ左右に分れ廊下にも人ノ充滿して待受暫して双方の両親並進て左右に分ル統て夫婦肱を交て同く並進男ハ黒装束白襟錦に白手袋女ハ白装束にて白紗の如物を以テ頭并面を覆ひ後に瑤て腰下に至る日本の装束と甚異ならず勿論服ハ違候得共男ハ黒女ハ白なり綿帽子の故事ハ不存候得共矢張西洋の如潔白の様を頭為ならん左すれハ紗を被も綿を被も同じ意味たろうと被思候夫婦僧の前に至て跪く僧経を誦了て指環を換て兩人に授是交易ハ夫婦に成た証拠と云婦時にハ見物人我先にと戸口に或馬車を取巻新婦の顔を見んとす寺の式ハ是にて終共神の礼式ハ家内にて多取行由何か荷重の物を御遣被下候ハ麻布長坂居住の元佐土原藩知事の弟君此度帰朝し来春早々にハ再ヒ遊学の由に候間那珂先生へても御頼申其辺御聞被成候ハ御都合の宜候尤其頃ハ博覧会連も来たらうから彼輩の内にても別

に不都合ハ無之候先生に今度書状ニ写真の届分を御願申然も別段呈書も不致候間宜敷御申訳被下度候先ハ無事為御知迄頓首

御尊父様

武夫拜

至机下

再啓当四日に初雪降候得共薄雪故直に消候然(虫喰)□□□余程寒成候

(長閑注記1)

「六十八日ニシテ達シ」

(長閑注記2)

「(朱書) 明治九丙子一月廿一日達シ二月八日返事出し」

(長閑注記3)

「武夫一人ノ写真明治九丙子年二月三日那珂氏ヨリ達シ三人並写真同年四月三十日鍵屋茂兵衛ヨリ達シ右三名ノ写真上田農夫依望明治十二年七月十八日遣シタリ」